

書評

坂本 誠

『ウェスレーの聖餐論——宣教のわざとしての聖餐』

(教文館、2009年、1995円)

島 隆三

坂本誠氏の力作『ウェスレーの聖餐論』について書評を書くように依頼され、どうして自分のような者にと訝ったが、昨年の方たちの群のセミナーに坂本師を主講師としてお招きし、ウェスレーの聖餐論について語って頂いたので、そういうことになったのであろう。その任にふさわしい者ではないが、この際自らの勉強のためにお引き受けした。が、真に不十分な紹介になったことをお許し願いたい。

著者は若い時にアメリカのナザレン・セミナーに留学され、そこでウェスレー神学と本格的に取り組み、帰国して伝道牧会の傍ら、さらに立教大学院で研鑽を積まれた。そして、ウェスレーとその神学において、聖餐の占める重要性に注目して学びを深め、いくつもの論文にまとめられたが、今日までの氏のウェスレー研究の集大成として結実したのが本書である。本書の土台になったのは、著者がナザレン・セミナーに提出した牧会学博士号の論文であると「はじめに」に記しておられる。そこには、ウェスレーの救済論において、「義認と聖化をつなぐ架け橋としての聖餐の教理」という言葉があり、さらに本書を読み進むと、「敬虔のわざ (Works of Piety) と慈愛のわざ (Works of Mercy) を紡ぐ恵みの手段としての聖餐」(p193)という表現にも啓発させられる。著者は、恵みの手段を「敬虔のわざ」と「慈愛のわざ」の二つに分ける従来の分け方ではなく、両者の間に礼拝や集会、また聖餐等の「共同体的恵みの手段」を置いている。

本書は、英国国教会（高教会）の司祭であったウェスレーが生涯を通じて聖餐を重視したことと、その力強いメソジストリヴァイヴァルとがどのように結びつくのか、また、ウェスレー神学の中心課題である救済論（義認から聖化へ）において聖餐はどう位置づけられるのかという問いに答を与えようとしている。また、著者自身の小岩教会における伝道牧会の実践の中で経験し、確認した事なども記されてあるから、読者の教会における教会形成にも新たな示唆を与えられるに違いない。今日、聖餐が各所で問題にされており、いやでも聖餐について考えざるを得ない状況におかれている。このような現状の中で、本書が私たちに語りかけるものは大きいと感じている。

初めに、目次に目を通して頂きたい。本書全体の展開が大体分かると思う。はじめに、凡例、序論に続いて、

第1章 ウェスレーの生涯—聖餐理解を中心として

第1節 幼少期

第2節 前期（1725—38）—神の像の墮落、回復の個人的理解

第3節 中期（1738—65）—救いの順序の個人主義的解釈

第4節 後期（1765—92）—神の国の社会的、歴史的視点

第2章 ウェスレーの聖餐論研究史

第1節 恵みの手段としての聖餐

1、ヘンリー・ナイト

2、オレ・ボーゲン

第2節 礼典主義・福音主義の克服としての聖餐

1、オーネスト・ラッテンベリー

2、ジョン・ボーマー

第3節 エキュメニカルな視点からの聖餐理解

1、ロブ・ステープルス

2、フランツ・ヒルデブランド

第4節 新たな聖餐理解

第5節 要約

第3章 ウェスレーの聖餐論

第1節 恵みの手段としての聖餐

- 1、敬虔のわざ
- 2、慈愛のわざ
- 3、ウェスレーの聖礼典理解

第2節 ウェスレーの聖餐論のルーツ

- 1、ウェスレーの聖餐の教理の背景—ジェレミー・テイラーとの比較
- 2、ジェレミー・テイラーの生涯
- 3、ウェスレーとジェレミー・テイラー
- 4、ジェレミー・テイラーの聖餐理解とウェスレーの聖餐理解
 - ①祭壇の神学 ②犠牲の概念 ③参加の概念と新しい命の付与
 - ④神秘的な神の臨在の教理 ⑤聖餐と聖霊の教理

第3節 要約

第4章 ウェスレーのプラクティカル・ディヴィニティ

第1節 ウェスレーと英国教会の三支柱

- 1、聖書
- 2、伝統
- 3、理性
- 4、経験
- 5、四つの支柱の関係

第2節 ウェスレーの英国教会における位置

第3節 ウェスレーのプラクティカル・ディヴィニティ

- 1、ディヴィニティの内容
- 2、ディヴィニティの目標と聖餐の役割

第4節 要約

第5章 宣教のわざとしての聖餐

第1節 ウェスレーの回心的聖餐論

第2節 宣教のわざとしての聖餐

- 1、ウェスレーの伝道的聖餐論
- 2、フェッターレイン・ソサエティとの関係
- 3、真実のキリスト者
- 4、先行する恵みとの関係

第3節 宣教のわざとしての聖餐の適用

- 1、アメリカのナザレン教会の聖餐理解
- 2、聖餐受領者の資格
- 3、福音としての聖餐理解

第6章 永続的信仰確認の場としての聖餐

第1節 日本文化について—特に罪概念について

- 1、恥の文化
- 2、グループ思考
- 3、創造者としての神概念の欠如
- 4、聖化概念の土着化の問題性

第2節 確信を与える恵みの手段としての聖餐

- 1、聖餐の二つの役割
- 2、恵みの手段の役割
- 3、共同体的な恵みの手段の役割
- 4、共同体的視点の必要性
- 5、義認と聖化を紡ぐ聖餐

第7章 結論

なお、巻末の資料として、1、日本ナザレン教団小岩教会聖餐式文、2、参考文献がある。

以上、目次に目を通すだけでも、本書のおおよその展開がお分かりになると思うが、全体を詳しく紹介できないので、本書の中から特に筆者にとって関心の深かった所を抽出するようにして以下にご紹介したい。

まず序論において、ウェスレーの生涯とその思想形成が簡潔に記されるが、特に、ウェスレーには三つの目標があったという。「魂の救い」「心と生活の聖性」「人々における正義の確立」である。ウェスレーが目指したものは、個人の中に福音的回心が起こり、心と生活の聖性がこの世で獲得され、それが発展的に社会まで進展していくことであった。著者は、このウェスレーが目指したものの全体を視野に入れながら、ウェスレーの聖餐論を中心にウェスレー神学を構築することを目的として本書を著したと序論に記している。この点をまず確認

しておきたい。

第1章では、幼少期から初めて、ウェスレーの生涯を前期、中期、後期に分けて概観されるが、特に若い日にジェレミー・テイラーやトマス・ア・ケンピス等の実践的神秘主義者との出会いにより、キリストを目標としてきよさを追求していこうとする彼の生涯の基礎が築かれた。オックスフォード大学のフェロー（特別研究員）の時代にホーリークラブを結成するが、ここでノンジュラー（臣従拒誓者）との出会いがあり、彼らの影響を受けた。特にホーリークラブが指導を仰いだウィリアム・ローもノンジュラーであった。初期ウェスレーにおいては、聖餐は聖性を獲得するための「善きわざ」であった。この頃、ダニエル・ブレヴィントとの出会いもあった。ブレヴィントは聖餐の強調と伝道への強い意欲を兼ね備えた人物であり、ウェスレーは彼からも影響を受けた。

ウェスレーの福音的回心は、モラヴィア派との出会いが契機となったことはよく知られているが、しかし、ウェスレーはモラヴィア派に対して一つの疑問を抱いた。それは彼らが恵みの手段を使用しなかったことである。回心の前も後も、聖餐をはじめとする恵みの手段を重視するウェスレーは、モラヴィア派とも訣別せざるを得なかった。ウェスレーにとって、聖餐は内的聖性を求める不可欠な恵みの手段であった。

後期ウェスレーは、前期、中期に彼が求めていたものが、彼の中で包括的に統合されて、個人的聖化と社会的聖化が結実している時期である。この時期に、彼は多くの社会的パンフレットを出版した。ウェスレーは晩年においても聖餐を重視し、より頻繁に聖餐に与り、また聖餐式を執行了。時には千人を超える人々にも聖餐を授けている。ウェスレーの最後の言葉「神が共にいますこと、これが人生最大のことだ」は、生涯聖餐を守り続け、主と共に生きる中から生じた言葉である。

第2章のウェスレーの聖餐論研究史は、年代順ではジョン・ボーマーの「初期メソジズムにおける主の晩餐の礼典」(1951)に始まり、ヒルデブラントの「私はキリストを差し出した」(1967)、さらに、ラッテンベリー他ここ20年程の間に出版されたウェスレー研究の中の聖餐論に関わることを簡潔に紹介している。これらの研究についてほとんど何も知らない筆者も、この簡潔な紹介に触れるだけで、ウェスレーの礼典論、聖餐論が様々な角度から検討されてきた

ことが分かり啓発された。特に、18世紀の英国国教会に命を吹き込もうとしたウェスレーの福音的聖霊運動がその礼典重視とどのように結びつくのかという点についての研究者たちの考察に興味を覚えた。これらの聖餐論研究を踏まえた上で、著者自身の聖餐論が展開されていく。

さて、いよいよ第3章でウェスレーの聖餐論に入るが、そのルーツとしてまずジェレミー・テイラーの聖餐論との比較から語り始める。第一に、テイラーにとって祭壇は特別の意味を持つ場所であった。祭壇は神秘的な神の臨在が起こる場所であり、人々に聖性をもたらし献身を促すところでもある。テイラーにとって、祭壇はキリストの犠牲とわれわれを結ぶ結合点であった。ウェスレーにとっても、祭壇は神の臨在するところであり、神との交わりが起こる場所でもあった。祭壇の前は「恵みの座」と呼ばれるが、そこは「御子の体と血、そして我々が必要としているすべての祝福をわれわれに提供してくれる」場所であった。第二に、テイラーにおいては犠牲の概念が重要視されている。キリストの犠牲と聖餐受領者の献身としての奉獻である。その両者を仲介するのが聖餐執行者の祈りである。ウェスレーにおいては、聖餐で起こることはキリストの真臨在である。聖餐に与ることにより、キリストの犠牲と一つになり、罪の赦しを確認し、聖餐式の讚美歌にあるように「主イエスの贖いの血の中できよめられ、われわれ自身を神に献げる」。順序が大事である。第一にキリストの犠牲、第二に聖餐執行者である司祭の仲介、第三に聖餐受領者の献身である。

次に、テイラーの聖餐論において重要なことは、参加の概念である。聖餐受領者はただ受け身で聖餐式に与るのではなく、積極的に参加するのである。それはウェスレーにおいても同様である。聖餐式はキリストの受難劇の再現とも言えるが、聖餐受領者はそのドラマの傍観者に留まらず、そこに参加することが求められる。その参加の概念は、さらに内的な意味でも言われることである。ウェスレーはこう言う。「私はそれ（参加）が内的な事柄であると信じる。人の魂の中での神の命、神の本性への参加が起こり、キリストにある心または、私たちを創造された方の像への心の刷新が与えられる。」

ガラテヤ 2:20 のキリストの内住は聖餐への積極的な参加においてこそわれらの中に起こることである。

テイラーの著書「真臨在」(Real Presence) はウェスレーにも大きな影響を与

えたと思われる。パンとぶどう酒は外面的には変化しないが、聖霊の力においてキリストに結びつき、聖餐受領者の内面に変化をもたらす。そこにキリストが臨在するからである。これはアングリカン神学の立場を継承するものである。この神秘的な真臨在がいかにして受領者のものとなるのか。そのために、聖霊の役割が重要なものとなる。

東方教会には聖餐においてエピクレーシス(聖霊降臨の祈り)の伝統がある。この概念は西方教会では後退し、行われなくなった。エピクレーシスこそ、われわれの信仰を呼び起こし、聖餐を有効なものとする。その意味ではテイラーもウェスレーも、東方教会の影響を受けていると思われる。受領者は聖霊の臨在の中で聖餐を受ける。聖霊の臨在がなければ聖餐は無効である。聖餐は、聖霊に促された信仰をもって受けるのである。

以上、ウェスレーの聖餐論のルーツをジェレミー・テイラーに求め、両者の聖餐論を比較検討しながら、ウェスレーの聖餐論の特色を明らかにした。ここで著者は、ウェスレー独自の聖餐論に筆を進める前に、プラクティカル・ディヴィニティという一章を設けている。この章の意図がはじめ筆者にはよく分からなかったが、本書の目的が「聖餐論を中心に、ウェスレー神学を構築すること」と著者が序論で述べているので、ウェスレー神学の全体像をプラクティカル・ディヴィニティという言葉で言い表して、ウェスレー神学の特色を抽出しようとする努力ではないかと受け止めた。

さて、プラクティカル・ディヴィニティとは何か。実践神学とでも訳すこともできようが、もちろん著者はウェスレーの用法に従ってこの語を用いている。当時の英国では *theology* ではなく *divinity* を神学という語に用いていたようだが、ウェスレーは特に *practical divinity* を多く使用した。ウェスレーは自分の神学をできるだけ平易に表現し、一般の人々が良く理解できる言葉で言い表そうとした。だから、学問的論文よりも説教を重んじ、さらに讃美歌や祈祷書において教理を実践的に展開する英国国教会の伝統に意識的に従っている。しかし、伝統に縛られていたのではなく、何が神の意志であるかを問う中で、国教会の伝統にはない野外説教、自由祈祷、組会、聖餐における讃美歌の使用等にも大胆に挑戦していった。このプラクティカル・ディヴィニティの章では、英国教会の三支柱と言われる聖書、伝統、理性にもう一つ「経験」を加えたウェスレー

一の四支柱について論じ、また、ウェスレーの英国教会における位置、英国教会の聖餐論（聖餐の役割）等が取り上げられている。

さて、いよいよ第五章は本書の副題ともなっている「宣教のわざとしての聖餐」である。著者はウェスレーの聖餐を宣教のわざとして捉えているが、それは日本の教会における今日的課題でもある。宣教のわざとして、聖餐は二つの側面を持っているという。一つは回心を与える側面（converting grace）であり、もう一つは確信を与える側面（confirming grace）である。これらのことが5章と6章で取り上げられる。

ウェスレーは聖餐を、名ばかりのキリスト者が真実のキリスト者になるための回心を与える儀式として見た。ウェスレーにとって聖餐は、先行する恵みを失った者や、罪が赦されたという確信を失った者が、聖餐を受けることにより回心を与えられ、信仰復活の手がかりをつかめる場であった。これはウェスレーがソサエティにおいて、さまざまな教派の人々に聖餐の場を開放したこととも関連する。

当時のモラヴィア派の聖餐観は、信仰の確信のある者、清い心を持つ者が聖餐に与るべきだと見ていた。事実、ウェスレーが1738年にヘルンフォートを訪れた時、〈疑いによって揺れ動く信仰者〉とみなされ、陪餐を拒否されたのである。しかし、ウェスレーは「信仰を持たない者も主の晩餐に与って信仰を受け取ることが出来る」と考えていた。ここで、「信仰を持たない者」というのは、全くの未信者ではなく、信仰者であっても「真実のキリスト者」になりきっていない者、「罪を克服できない者」を意味していた。そのような信仰の不確かなキリスト者に、聖餐は回心の恵み、または確信の恵みを与え得るというのがウェスレーの考えであった。しかしウェスレーは、聖餐に与る者の姿勢については次のような厳しい警告を与えている。

「人にまず吟味させなさい。聖なる制定されたものの本質と意図を、キリストの死を心から信じているか、もし彼に疑いがなければ、聖餐の杯を飲み、パンを食べさせよ。」

聖餐受領者は、祈祷と自己準備をもって聖餐に備えることが期待された。そこで重要なのは「神が喜んで与えるものは何でも受け取りたいと望むこと、…自分が全く罪深く、助け手のない状態であること」を自覚していることである。

また、ウェスレーは、準備が出来ていれば聖餐に子どもを招いたことがわかっている。その準備はカテキズムによる教育であったと考えられる。

第5章の最後に、著者は「福音としての聖餐理解」という一項目を記している。そこで、ラッテンベリーやチルコートがウェスレーの改革を礼典的・福音的改革の統合として捉えたのに対し、著者はもう一步進めて、ウェスレーは礼典を福音そのものとして見ていたのではないかと問い、「ウェスレーの聖餐理解を福音の宣言として宣教的に再評価する責任を今日のわれわれは負っている」と述べている。それはメソジストの流れを汲む者たちがいつしか、ウェスレーの聖餐に対する福音的、宣教的視点から後退して、説教（み言葉）のみに偏ってきたのではないかという著者の問題提起である。これを私たちは今日どのように受け止めるか。

第6章は「永続的信仰確認の場としての聖餐」と題する章であるが、まず日本人の文化的特性を取り上げ、創造者としての神概念の欠如から、聖書的な罪の意識に乏しい。このゆえに、義認や聖化の認識がどうしても浅薄になりやすい。この点に対して聖餐はどのような役割を果たすであろうか。ウェスレーは聖餐を信仰の位置（義認）を永続的に確認する場と考えた。キリスト者は聖餐によって自分の出発点を確認することにより、信仰の原点である信仰義認に立ち返り、行為義認に陥るのを防ぐことが出来る。そして、聖餐は信仰義認の確認ばかりではなく、聖化の前進に資する。それは漸次的聖化と瞬時的聖化の両者が起こり得る場である。ウェスレーは義認と聖化を結ぶつなぎ目としての聖餐の役割を重視した。

ここでウェスレーが重視した恵みの手段をもう一度見直してみると、心の聖性を目指す「敬虔のわざ」と生活の聖性を目指す「慈愛のわざ」との間に「共同体的恵みのわざ」を置くことができる。共同体的恵みのわざとは、礼拝、聖なる会話、聖餐、集会（バンド、クラス、ソサエティ）等である。それは靈性の修練としての恵みの手段と言うことも出来るが、聖餐を個人の敬虔のわざとしてよりも共同体的恵みのわざとして捉えることにより、救いの恵みに生かされるキリスト者が積極的にこの世へと遣わされていく。その大事な架け橋の役割を聖餐が果たすことができる。

本書は次の言葉で結ばれる。「ウェスレーの視野には、教会につながっている

信仰者のみならず、当時の英国全体にいた名目的キリスト者、真摯な求道者も中に入っていた。ウェスレーは、彼らに回心を与える恵みの手段としての聖餐を強調したのである。日本の教会の礼拝出席者が多様化している今日において、宣教のわざとしての聖餐を考えることは、教会形成にとって欠かせないのである。私たちは神の言葉と聖餐を紡ぎながら、聖餐により豊かにあずかる者としての責任をはたしていききたいものである。」

本書には、著者の牧会する日本ナザレン教団小岩教会の実践例にも言及されているが、外国人キリスト者を多く受け入れている教会の現状では、特に聖餐の重要性を再認識させられる。

日本宣教は全体として振るわない現状にあるが、宣教のわざとしての聖餐をウェスレーに学ぶことにより、日本宣教の活性化を図りたいという意図が著者にはあるであろう。また、聖餐の執行の仕方によって分裂の危機に瀕しているといっても過言ではない日本基督教団の現状においては、ウェスレーの包括的な聖餐論に学ぶことによって、分裂ではなく、他者を認めて一致していこうとする方向へ進んで欲しいと筆者は願わされた。著者の真摯な学びの姿勢と、それをただ研究に終わらせず、実際の伝道牧会に活かそうとしている著者の努力に心から敬意を表したい。しかし、それこそウェスレーが一生涯目指していたことであり、そこに今日も我々がウェスレーに学ぶ意義があると信じる。

(日本キリスト教団・仙台青葉荘教会牧師
東京聖書学校校長)